ユートピア

十文字良子

私は東京で生まれましたが、四歳（昔のかぞえ方）の時に、祖父母がさびしいからといって郷里の福島へ連れて行かれ、そこで、今でいうと幼稚園の年長組にはいる年まで育ちました。わずか三年の間でしたが一生心に残る思い出です。

祖母は家つき娘で体の大きな、子ども心にも無骨な人であったと覚えています。祖父はそれにひきかえ、色が白く、スラリとしてなかなかの美男子でありました。むことというと普通はおとなしいもののようですが、この祖父は、大変きむずかしく、わがままものであったということです。それで子どもらが全部とついだり東京へ勉強にいってしまったあとは、やはり気の強い祖母とはあまりしっくりいかなくて、その中和剤として私がやられたもののようです。私は祖母の縫い物をしている姿を見たこともありません。私を東京へ帰してからは八十五歳でなくなるまで一年に一度は必ず上京してきましたが、その時はいつでも「ダディロングレッグス」とか「イノックアーデン」などの英書を持ってきていました。きかないだけあってなかなかのしっかり者でした。

五人の男の子の全部を東京の大学を出し、四人の娘をそれぞれとつがせ、今ではその孫、ひこ、やしゃご、その連れあいまで含めると二八〇名にもなって、一年に一度、親族会を開くと実に壮観です。現在でもふえつつあるのですから、今年の干支のネズミと子孫繁昌くらべが優に出来る数字です。そういう祖母ですから、日ごろは料理とかご馳走らしいものなどはめったにありませんでしたが、雛の節句の時だけは別でした。昔、ご領主さまにご用金を用立てすると「過分に思うぞ」と手近のお品を下さってそれで殿さまの借金はパー。何十両の代りに、香箱だの火鉢だのが残るしかけになっていました。そのようなことで、お雛膳も、殿さまの紋入りのかわいいのがいくつかありました。それでびっくりするようなご馳走をして私のともだちを招いて

くれるのでした。お雛さまのご馳走というのは、たいがいきまっていますが、雛という字のもっている「小さい」とか、「かわいらしい」とかの意味のとおりで、かまぼこも紅や草色のひなかまぼこという小さな板付を何日もかけて京都からおくらせて、玉子焼もこれに合わせてかわいらしく巻き上げ、小袖形に切ってありました。阿武隈川の鮭とすじこの紅葉漬も必ずついていましたが、それは祖父の酒のさかなであって子どもの口には合わなくとも、その色どりは雛の膳にふさわしく、四月三日のこととて、よもぎも、つくしも、膳に供せられるのでした。この思い出は今でも私の心にしみついてはなれないのです。きっと親元をはなれ、はるばるきている幼い孫娘をふびんがった祖母の精一ぱいの心づくしであったのでしょう。

この祖母が庭の花では色を、落葉をひろっては数を、東京へ送るお餅では量を、そして勝手の大きなふり子時計では時間を教えてくれました。そのころの田舎の遊びは限りないものでした。山のむこうに夕日がかがやき、寺の鐘がなりひびき、からすがねぐらへいそぐころ、「早く帰らんしょ、天狗さまに誘われっから」とまだ遊びに夢中になっている子どもらに迎えの声がかかると子どもらは、本当に天狗さまがさらいにくるような気がして、一目散にあかりのついたわが家へ走るのでした。

水車小屋の一人者の源爺さんはのどのところに大きなこぶがたれ下がっていたので、いつ山へいって赤鬼か青鬼にこぶを取ってもらうのかしらと思っていました。お盆に仏さまにあげたご馳走やなすの馬を、里いもの葉っぱに包んで川に流す時は、川にいるかっぱにどうぞおしりをぬかぬよう今年もよろしくと、あいさつをするのでした。あのころの子どもの生活には、天狗さまもゆうれいも一つ目小僧も、子どもの世界の片すみにあって育っていたのです。明るいけいこう灯と、にぎやかなテレビで育つ現代の子どもには、そういう世界があるでしょうか。今の子どもは、テレビやマスコミなどで豊富に知識をもっているので、かぐや姫の、天狗はおかしくて、いくら「昔のおはなしよ」といってもなかなかのってきませんし、怪獣でさえも、次々に征服され、ボールや運動靴のマークとして酷使されるようになっています。必ずしも昔がよいというのではありませんが、あまりに、合理的、実証的になりすぎてしまって子どもの夢をふくらませることができなくなってしまったことを、悲しく残念に思います。

(私立十文字幼稚園)